

ハハハハ！）木まいでらエだばもうげでらだつてや。そうやって話きだごどあるづあ。分がるだて、そごのエのアレ。分がるだてな。」Y氏「マギちゃんとしたな、あのナヅうちに用意して、な、置く家あったでばな。へばその冬にこんだマギさこんだサラケやってしつあ、焚いだもんだもの。おーつきいロバダおえのあづのエでもあらあ、おーつきいロバダ、炉あって。そさ焚いだもんだよ。オラちせどぎそへそえさあだつてきたもの。」Z氏「オラもそれだばやたばてサラケだばやなも分がねもの。木だばこてな、やたばて」Y氏「その柴とがホラ。そのアノ、それごそかだえもの。馬食べねんたもの刈って、あの、燃料にしたでばの。うん、カポシて、つらがてうだでもんであつたあ！」

**操作** ▼乾いたものを家に運び、小割りにしたマキの上に、小割りにしたサルケをのせて燃やした。——Y氏「乾がへばこんだエさ持ってきて、そしてこう小さくして、マギ焚いで、マキさこうそれ被でやればまんだあつたかいだいな。燃えでるず。したていぶてして。」Y氏「それこんだこう、マギやって、そのマギ焚いだその上さサラケ乾いだのこうちせぐしてこうやれば、たいしたこうあたがくてあたんず。たつて、いぶていぶてえ。な。めねぐなてまてな。」Y氏「こう、な、木、割つてな。それど一緒に焚いで。燃料にしたず。したてこんだ目悪ぐなでばなこういぶるどごで。いまだばあたごどしても……」

**副産物** ▼館岡出身のZ氏は子どものころ、サラケを焚いている家に泊まりに行ったことがあった。煙のために涙が出て寝られなかった。Y氏は、サラケを焚くと暖かいが、煙がひどく、周りが見えなくなるほどだったという。Y氏もやはり、目が痛くて寝られなかった。だから、昔の人は目がよくなかったと考えている。——Z氏「なんだばかだばて（なにかの用事があって）、ほがさ（よその家に）行くべ、ま、へば泊まるでばの。つがるエさいて、ワラハドのづぎ。なも涙出はてなもちよて寝らいねずなあのまなごさちよて寝らいねずな（笑）。」Y氏「あたかいだばあたかいしてあつたばつて、いぶてふて。」Z氏「したはんであおムガシの人まなごいぐねひあの。」Z氏「なもまなごつあ寝らいねつきやよばに（行ったことがあつたけれども）」Y氏「たつて、いぶていぶてえ。な。めねぐなてまてな。」Y氏「したてこんだ目悪ぐなでばなこういぶるどごで。いまだばあたごどしても……」Y氏「んーい、目こんだいでして、寝らいねぐなてまんだ。うん。ニオイもほだし、いのナガもこう、ししけでまてばの。ししつでまてばの。そしたんだ。そういう生活しただ。オラ小さいとぎだば。」

▼スス臭いニオイがした。そしてそのススは、夏になると湿気のために垂れ落ちてきて、着物についた。——Y氏「まずニオイだばしたでばの。ししけくせえでばの。うん。エのながもさ、全部こうししけでまて、そひえこんだナヅなればアレあのシシてしだな」Z氏「タヅだべあな。あの屋根がらみな茅屋根であたごどで」Y氏「ナヅなつてくれば、こんだシシとげで、着るもんでもなんでもさつだわけ。」

▼多量に出るサラケの灰は、みな捨てたと思うが、記憶が定かでない。マキを焚いた灰はワラビをゆでる時に使った。——Y氏「灰、灰、その投げだでばの。したて、なも木焚いた灰だば蕨ゆがえるにあらな。あの使つたばてな。サラケの、アグだきゃ、んだアレほど出るもんだごどで、たんだ、こごいらさ……アグになってあーごーげなれば、どうしたべそれまでわがねえろう。きおぐ薄れでまてでや」（2016年7月20日取材）

## 4. 考察

### (1) 呼称

#### ・地域的な差異

「サルケ」と称するものが26名中5名、「サルケ」とも「サラケ」とも称するものが同6名、「サラケ」と称するものが同11名あった。今回の聞き取り対象地域では、おおむね「サラケ」という呼称が一般的であった。特に、つがる市木造の西部、日本海に近い丸山集落や出来島集落では、ほぼすべての人が「サラケ」と発音した。「シバタジャラケ」「シバタザラケ」という名称は、良質なサルケの産地である柴田地区で聞かれた。一般名称として「サルケ」と称する人でも、「柴田サルケ」とは言わず、「柴田サラケ（ジャラケ）」と言うのは何故だろうか。

古い時代にはこの近辺（七里長浜）で、「ガシ」とも呼ばれていたことが幕末の書物にみえるが<sup>36)</sup>、筆者の調査ではそのように呼ぶものはなかった。秋田県西部の昭和町や天王町（いずれも2005年から潟上市）など八郎潟周辺では、近年まで泥炭を「ガシ」（「ガス」）と呼んでいた<sup>37)</sup>。

#### ・世代的な差異

すべての人が「サラケ」と称した丸山・出来島地区において、唯一「サルケ」とも「サラケ」とも称した人は昭和36年生まれ男性だった。他の地域では、あきらかに世代間の差異を示すようなデータは得られなかった。

### (2) 年代・普及

採取や利用が確認できる時代として、昭和10年代後半（柴田④丸山⑱）、昭和20年代前半（柴田⑥菊川⑩出来島⑳）、

昭和20年代後半（菊川⑨丸山⑩出来島⑫大畑⑮）、昭和30年代前半（柴田②③⑦⑧丸山⑰⑱）、昭和30年代後半（柴田①丸山⑭）、昭和40年代前半（丸山⑯）、昭和40年代後半（出来島⑲）という回答を得た（各年代の「なかば」という回答は「後半」に含めた）。これらの回答は必ずしも利用の終焉の明確な年代について述べたものではないが、昭和30年代なかばころが利用のピークであったと推察される。「昭和30年代にマキストーブに変えてからは使用しなかった」（柴田③）、「昭和30年代に嫁ぎ先ではマキストーブを利用しており、サルケは使用していなかった」（丸山⑭）などの証言からは、炉からストーブへ設備が変化した時代と、サルケの利用の終焉とが重なっていることが見て取れる。ただし、柴田④丸山⑲⑳の例では、ストーブでサルケを焚いている。うち④⑲の事例は、昭和20年代の話である。比較的早期にストーブを導入した家では、ストーブでサルケを焚いたと考えられる。森山泰太郎は昭和45年に発行された書物のなかで「現在炉がストーブに代っても、まだ多少たかかっているはずである」と述べている<sup>38)</sup>。

### (3)性質や分布についての認識

**A,定義** サルケとは何かと尋ねると、人々は次のように説明した。

#### ・根である

「草の根（ネッコ）が密になったもの」（柴田②）、「カヤの根のようなもので、軽くて堅い。根っこを切ったものを乾燥させたものがサルケである」（丸山⑯）。サルケが植物の根であるという認識は、県内の他の地方でもよく聞かれる。植物の遺体の集積をとらえた表現であると思われる。秋田県横手市では泥炭のことを「根っこ」というが、これも同様の認識にもとづいているのではないだろうか。『東奥沿海日誌』（嘉永3年）を著した松浦武四郎は津軽地方の泥炭を「此辺の土は草の根の堅りしものなると見えて至てよく燃るもの也」<sup>39)</sup>と記している。

#### ・腐ったものである

「沼地のカヤなどが腐ってできたもの」（柴田④）と答える方もいた。泥炭は、「植物生産量が微生物による有機物の分解量にまさるとき」<sup>40)</sup>に堆積する。「ほとんど未分解の植物組織から、それが完全に分解してできた腐植に至るまでのさまざまな段階の有機物の集合体」<sup>41)</sup>であるため、植物遺体の分解の度合いはさまざまである。その分解の過程を経験的に「腐る」と表現したものと思われる。

#### ・草や藻である ・腐らずに堆積したものである

他地域でみられるこの種の認識は、今回の対象地域では示されなかった。

#### ・その他

「サルケには目がある」（柴田③）という人がいた。木の柾目と同じように、乾燥したサルケを小割りする際に、スムーズに割れる方向とそうでない方向があるというのである。植物の繊維が積み重なっていく過程で時間的に等質な面、つまり水平方向が、サルケの「目」（異方性）になっていると思われる。「やや黄色味を帯びる」（柴田⑤）という、色彩に関する指摘もあった。サルケとは、「猿毛」（猿の毛）が語源であるという説があるが<sup>42)</sup>、その真偽はともかくそのような説がまことしやかに語られたのは、動物の毛を思わせるような質感と色を呈していたからであった。

「タキギの不足を補う燃料である」（丸山⑳）、「何も燃やすものがない人が使うもの」（出来島㉑）であると説明する人がいた。サルケがタキギや他の燃料に劣るものであるという考えを示している。前出『東奥沿海日誌』（嘉永3年）では「樹木少し。故にガシ（サルケ）を薪の代りに用ゆ」「樹木無故にカシ（サルケ）ヲ皆用る」<sup>43)</sup>と記している。近年の自治体史等でもサルケは「燃料の不足」を補うものとして位置づけるものが多くみられる。話者が上述のように語るのには、近代以降にこういった記述に象徴されるような知識が流布した結果かも知れない。というのは、筆者の聞き取りによれば、県内の他地域では、サルケを燃料として劣るものではなく、その価値を高く評価する事例もみられるからである。さまざまな捉え方があることを確認したい。

### B,分布

**・地域的ひろがり** 「金森方面はサラケがちけ（近い）」（柴田②）、「昔はカヤヤヂが広がっていて、そこに分布していた」（柴田⑥）、「見渡す限りのカヤヤヂが広がり、周辺は泥炭地だった」（丸山⑯）、「ヌマヤヤヂデ（カヤヤヂ）にある」（丸山⑳）などの証言からは、かつて一帯にカヤが繁茂する湿地が広がっており、そこにサルケが分布していると捉えられていたことがわかる。また、「斎場方面の田が昔はヤヂで、そこにあった」（柴田⑦）、「木造吉見方面はサルケがちえしてあった（強かった）。吉見の田は『サルケ田』と呼ばれた。菊川は吉見よりもサルケが少なかった」（菊川⑩）などの証言からは、柴田集落では、集落の北方にある湿地がサルケに富んでおり、菊川では南方の吉見地区がサルケに富むと考えられていたことがわかる。サルケが『強い』、サルケが『近い』という表現は、サルケの豊富さや分布についての生活感覚にもとづく独特の表現である。地域差についての認識を示している。

いっぽう、西の海岸部に近い集落では、ため池やヌマに分布するものという認識が示された。すなわち「丸山から

出来島に向かう途中のヌマに分布」（出来島⑳）、「出来島にはヌマが多く、そこからたくさん採れる」（出来島㉑）「ヌマヤチヂデにある」（丸山㉒）というものである。

山どこ（山に近い集落）では、サルケの存在すら知られていなかった。「出身地の館岡ではサルケを知らず、嫁いだから知った」（大畑㉓）という。

・**上下のひろがり** 採取の際に表層部を切り捨てる（柴田①③④⑤）ことが通例おこなわれる。その厚さは1尺5寸（柴田③）、3尺（柴田④）、15～30cm（柴田⑤）である。サルケの層が分布する深さは、同じ柴田という地域でも多少の違いがあったようだ。これは、屋敷地内から採掘する場合もあれば、現在つがる市斎場方面の湿地から採掘する場合もあり、条件が異なっていたからである。「金森方面はサラクが近い（層が地表に近い）」（柴田②）、「木造吉見方面はサルケがちえてあった」（菊川⑩）という証言は、地域によってサルケの層までの深度や層厚が異なることについての、生活感覚に基く表現である。

### C,質的差異、質的評価

木造柴田地区のサルケは古くから「柴田さるけ」と呼ばれ一種のブランド品として近隣町村に流通していた。『津軽口碑集』には「さるけとは泥炭のことなり、西津軽郡柴田村に産するもの尤も佳なり、故に『柴田さるけ』の名あり」と記される<sup>44)</sup>。聞き取りでは、「他村で評判になるほど、柴田のサルケは良質だった。十分に炭化している柴田のサルケこそが最も優れている」（柴田③）、「柴田のサルケが良いのは、大津波で流れてきた木の枝が入っていて良く燃えるからである」（柴田⑤）、「柴田のサルケはよいと評判で、みんな買いに来た」（柴田⑥）という証言を得た。同地では今も「柴田さるけ」の良さを住民が記憶に留めている。その良さは、炭化の進み具合にあった。

「古くからある、もとのサルケは堅く、沼地のカヤなどが腐ってできた軟らかいものとは異なる。前者が着火も燃え具合も良いサルケである」（柴田④）、「屋敷地内に産出するものを『ヤシギサルケ』という。堅くて火持ちがよい。湿原に産出するものは繊維質で軟らかく、燃え尽きるのが早い。前者が良いサルケである。両者はまったく質が異なる。田から採る場合もある」（柴田②）などの証言からは、炭化の進んだ堅く締まったサルケが良質であると考えられていたことがわかる。同様の認識は隣の菊川集落でも示された。「田から採れるサルケを『田ザラク』、湿地から採れるサルケを『ヤチザラク』といった。両者の違いは、堅炭と軟炭の差に似て、前者が良品で採れる場所も少なく貴重である」（菊川⑨）という。柴田では集落内の屋敷地に近い場所（例えば現在、豆畑になっている集落北東部の黒滝、南内海近辺）から採れるものが堅くて火持ちのよい良品であったという。このサルケを土地の人は「ヤシギサルケ」とも称した。これらのことから、屋敷地内や田から採れる「ヤシギザラク」「田ザラク」などは堅く火持ちがよい良品であり、湿地から採れる「ヤチザラク」は繊維質で軟らかく、一気に燃え上がるが火持ちが悪いという欠点があることから、両者の優劣が評価されていたことが分かる。

また、「ツヂ混じりゃあダメだとか、色々あるんですよ。ヨシの根とが植物の根ばかりのものもあります。」（柴田①）というように、繊維質で軟らかい「植物の根ばかりのもの」と同様に品質の劣るものとして「土混じりのもの」（柴田①）があった。泥炭は、粘土砂などの混入や地下水位の低下による通気性の向上などにより分解が進むが、作土としてはよいが燃料としては適さないものであると思われる。「土混じりのもの」（ツチマジヤリ）とは、半ば分解の進んだ泥炭のことであると思われる。

以上から、「ヤシギザラク・田ザラク > ヤチザラク・ツチマジヤリ」という価値の図式を描くことができる。

### (4)入手

#### ・自分の土地(権利地)から、自分で掘る

サルケを利用したと答えた18名（柴田①②③④⑤⑥⑧、菊川⑨⑩、丸山⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲、出来島⑳㉑㉒㉓㉔、大畑㉕）は、いずれも各家庭で自ら採取することによりサルケを手に入れている。その場合、自分が所有する土地あるいは採掘権を持つ場所から入手する場合がほとんどである。丸山や出来島では、ムラの共有財産であるため池やヌマに採掘権（場所）が設定されていた。家ごとの権利は、池の底の土地に固定されたものであった。

#### ・他人の土地(権利地)から、自分で掘る

サルケを採る土地や、権利を持っていない場合には、サルケに恵まれた土地へ切りに行く場合もあった。その場合は親戚を頼った（丸山⑫⑬）。また、他村の人が所有する原野から採取させてもらうかわりに、サルケ（乾燥まで終了した完成品）を何十年ものあいだ提供しつづけたという事例もある（柴田⑤）。サルケを長年のあいだ提供する見返りとして、その土地を譲られる約束が交わされたが、昭和40年代に圃場整備により原野が乾田化された際に、その土地は結局譲られることはなかった。

## ・購入する(売買と流通)

サルケの採れない地域の人々や、田の下から掘ることで大切な田を傷付けたくない人からの需要があった(出来島②)。

森田ではムラの南側にある狄ヶ館溜池から自家用としてさかんに採取されたが<sup>45)</sup>、購入する場合もあった。「森田村出身の妻が、森田ではサルケを購入して焚いたと話している」(柴田①)と話す男性がいた。購入先は不明であるが、「買ったサルケは小さかった」(同)という。

柴田や菊川へ「買いに来た」「売りに行った」という話も複数聞かれた。「柴田から売りに行ったり、他所から買いに来たりした。後者が多かった」(柴田③)、「他村から買いに来た」(柴田⑥)、「売買も多少あった」(菊川⑨)などの証言である。柴田のサルケは「柴田さるけ」といわれ、「西津軽郡柴田村に産するもの尤佳なり」と評価されて<sup>46)</sup>、往時はムラの経済を支える一大産業として採取がおこなわれていた。大正13年当時、柴田村における米に次ぐ産額を誇る産物は「泥炭(サルケ)八,〇〇〇円」であった<sup>47)</sup>。柴田の昭和6年生まれ男性によると、一冬分が100枚～120枚、価格は米1俵相当であったという<sup>48)</sup>。となりの菊川村も「此の地特に品質良好の泥炭を産し他方より来り購買するもの多き」<sup>49)</sup>とこころであった。

出来島でも売買がみられた。「サラケの採取と販売を生業とする人もいた」(出来島②)という。昭和59年の弘前大学の学生による木造永田地区での聞き取り調査(1984)の記録には「燃料もやはり『サルケ』で、出来島や土滝から買って来た」と記される<sup>50)</sup>。丸山や出来島など木造の東部は、親戚を頼って切りに来るほどのサルケの産地であった。出来島では、売買契約そのものは出来島の村内でおこない、のちに購入者の自宅まで馬で届けた。商圏は木造近郊から遠くは鶴田(鶴田町)にまで及んだ(出来島②)。

ほかに、筆者の過去の調査では、繁田(つがる市稲垣町)でも、サルケの採掘と販売を専業とした人がいた。なかには利益によって家一軒を建てた人もあった<sup>51)</sup>。また、『五所川原市史』によれば、長富(五所川原市)ではサルケをソリに積んで、遠くは梅田(五所川原市)や鶴田(鶴田町)まで売りに出かけたという<sup>52)</sup>。

上述のように、サルケは北は稲垣から南は森田、西は出来島から東は鶴田まで、西北津軽郡と五所川原を中心として近隣町村に流通してはいたが、いわゆる地産地消的な範囲の流通では消費量が限られる。県外をも射程にいった、更なる消費拡大を画策した時代もあったようだ。それを物語る商品のひとつに、「泥炭菓子」(さるけ菓子)がある<sup>53)</sup>。当時の地元紙の記述には、この菓子はサルケを都会に宣伝するために考案されたものであるという。「木造町は津軽三新田のうち木造新田の中心地であつて該新田地方は泥炭の産出を以て聞こえてゐる。この泥炭の形態を都会人に紹介すべく明治二十七年物産品評会に際して考案製造されたものはこの『泥炭菓子』である」と記され、「着想の面白いそして独特の味ひをもつてゐるもの」として好評を博し、菓子博覧会や地方の品評会で数々の賞牌を得ていると報じられる<sup>54)</sup>。

サルケの産地としてのイメージが、闇米の取引に利用されたという事例もある。出来島を含む七里長浜一帯では、戦後まもないころ、闇米をサルケに隠して運搬していたというのである。「サルケ(泥炭)の中に米を隠す方法が流行っている、新田地帯は薪が不足なためサルケを薪代用にたいしているがこれを利用してサルケを荷車に積む前に闇米六俵ほどを下の方に積む、その上に泥炭を積み重ねる、これらの荷馬車で運ばれる米は多く七里長浜の海岸取引だ、全くヤミ(泥炭)米サ(以下略)」<sup>55)</sup>。最後の「ヤミ(泥炭)」という表現は、泥炭の真っ黒なイメージを闇取引に重ね合わせたものであると思われる。出来島では、馬車に積まれたサルケが往来することは、ごく自然な光景であっただろう。そのイメージが、闇米取引の偽装に利用されたと考えられる。

ところで、当時のサルケの価格はどのようなものであっただろうか。今回の聞き取りで、大正13年生まれの出来島の男性(出来島②)から得られた証言と、3年前の聞き取りで得られた柴田の昭和6年生まれ男性(紀要39-74)の証言を比較した。すると、両者には大きな開きがみられた。前者(出来島)は「1,000枚あたり米1.5俵相当(運賃は+0.5俵)」、後者(柴田)は「100～120枚で米1俵」という。差があるにしても、あまりにも大きすぎる。その理由として考えられることは、出来島の男性の語る1枚は、「商品としての1枚(1ヶ)」であり、柴田の男性の語る1枚は、「採掘時の1枚」ではないかということである。そのように仮定し、価格と量について整理したものが下の表1である。体積に換算して比較すれば、出来島のサルケは米1俵あたり約3m<sup>3</sup>、柴田のサルケは米1俵あたり約2m<sup>3</sup>強である。仮定が正しいとすれば、優品として知られた「柴田さるけ」は、出来島のサルケの1.5倍ほどの価格で取引されていたことになる。しかし、売買についての具体的な証言は非常に少ないことから、上記のわずかに2事例をもって判断することはできない(サルケのサイズについては別項「F, サイズと量」を参照)。

地域	話者の生年	A)一冬の必要量	B)切出し1枚(サイズ)	C)製品1ヶ(サイズ)	D)米相当	1俵あたり体積	出典
出来島	大正13年生	1000ヶ (140マロ)	約30×30×15cm (13,500cm <sup>3</sup> )	10×30×15cm (4,500cm <sup>3</sup> )	1.5俵	3.0m <sup>3</sup> (A×C÷D)	本稿 (出来島②)
柴田	昭和6年生	120枚 (～100枚)	約30×30×20cm (18,000cm <sup>3</sup> )	7.5×30×20cm (4,500cm <sup>3</sup> )	1俵	2.2m <sup>3</sup> (A×B÷D)	拙稿2015,pp.75 (事例⑧)

表1 サルケの価格 ※B)切り出し1枚, C)製品1ヶは、ともに乾燥前



**(5)採取****A,目的**

・**自家用燃料** サルケは燃料として活用されたものと思われる。しかし、「冬季の暖房用」であると語るものはわずか1名であった（出来島⑭）。自治体史にはサルケを「冬季の暖房用燃料」とであると記述するものが多い。これはサルケの燃料としての多様性を無視した記述である。サルケは暖房に限らず、煮炊きにも、風呂焚きにも用いられた〔9〕、用途の項参照〕。

・**販売用** 販売するために採掘をおこなった人もいた（出来島⑮）〔4〕入手の項参照〕。

・**健全育成** 明治時代の菊川では、青年団による販売を目的としたサルケの採掘やわら工などの共同作業がおこなわれた。団員間の紐帯を強め、ムラの青少年の健全な育成のために有益だったという。当時の東奥日報には「夜間村中の青年一人として他に遊ぶ者なく皆此処に集まるを例とす」と記され、サルケの採掘という共同作業が、模範的な生活を送っていることが報じられている（本稿96ページ）。

・**土地改良にともなう副産物である（開田、田地の改良、水路の整備）**

下北地方では、田地の改良にともなう副産物であるという認識が主流であった。上北地方でも、開田や水路の整備に伴う副産物として語るものが複数あった。これに対し、津軽地方ではサルケを採取することが主目的で、土地改良に言及するものは少ない。今回の調査では「田を低くするため」（柴田③、直接経験）、「サルケを採取するための口実として田を低くした」（柴田③、伝聞）という回答があった。目的としては語らなかったものの、「サルケを掘った場所に客土し、続けて稲作をおこなう」という事例（柴田④）をあわせてもわずかにのべ3例である。そしてこの3例いずれも、燃料の確保を目的として同時に掲げている。開拓の時期（下北は明治期、上北は戦後で、いずれも津軽平野に比べると新しい）や、低地の広範さ（田名部低地、沼崎低地いずれも津軽平野に比べると規模が小さく山林が近い。逆に津軽平野では、田地から採取しなくても、周辺の湿地やため池から泥炭を入手できる）など、時代的環境的要因が関わっていると推察される。

ただし、菊川地区では開田を目的とした泥炭採取の共同作業が行われていたことが明治45年の新聞に報じられている<sup>56)</sup>。菊川の青年団が地主から土地を借用し、1年目に泥炭の採掘、2年目から稲作をおこない、3年の期間が終われば地主に水田として返却するという方法でおこなわれた。採掘した泥炭は、特産品として売却されたようだ。青年団、地主とも一挙両得であり、採掘が開田を兼ねるという意味で作業的にも一石二鳥であった。

**B,時期**

・**田植え前** 田から採取する場合には、稲作とちあわなないように、田起こしや田植え前に採取した。「田からの採取は、4月末の田植え前」（柴田③）、「田からの採取は春先」（柴田④）、「田からの採取は、田起こしよりも前」（菊川⑩）、「アラダ（田起こし前の田）から、田植え前の春先」（大畑⑮）などの証言である。サルケを採取したまさにその田で、つづけてその年の稲作をおこなうというケース（柴田④）では、掘った場所に客土がおこなわれた。

・**秋口** 夏から秋にかけての収穫前の時期にサルケの採取をおこなう事例は、ため池や沼地から採取する場合にみられる。「9月はじめ、溜池の水がなくなるころ」（丸山⑫⑬⑭）、「7～8月ころ、溜池の水が少なくなり底があらわれたころ」（丸山⑯）「7月末から8月にかけてヌマから」（出来島⑮）、「夏からお盆にかけて、溜池やヌマから」（出来島⑮）などの事例である。稲の成長が一段落し、ため池の水位が低くなるころ、そしてかつ収穫という農繁期を避けるかたちで採取がおこなわれたものと思われる。

・**収穫後（あるいは田植え前と収穫後ともに行う場合）** 今回の聞き取りでは収穫後に採取をおこなうという証言はなかった。

・**通年** 湿地（ヤヅ、サラケヤヅ）や原野から採取する場合は、時期的制約がないため通年でおこなわれた（柴田③④）。「サラケ専門の場所（ヤヅ）から6月頃に採取した」（柴田⑧）という証言もあった。おそらく5月の田植えを避けたのだろう。

**C,場所**

**湿地や原野** 湿地や原野からサルケを採ると答えた人は、柴田①②③④⑤⑥⑦⑧、菊川⑨、丸山⑬⑭の11名にのぼる。サルケが採れる湿地のことを「サラケヤヅ」と言った（柴田④）。この場合は一般名詞だが、「サラケヤヅ」という表現は地名にもなっており、『新撰陸奥国誌』にみえる。柴田集落の北方である。「近郷にてサル毛〔泥炭のこと已に七小区の条にあり〕を掘しに常よりその燃土の多き処あり」と記され、土滝村の北辺、下遠山里村方面にかけての湿地帯を「猿毛谷地」と称した<sup>57)</sup>。安政2(1855)年に成立した書物『合浦奇談』には、南北を猿毛谷地に接する<sup>58)</sup>嘉納村（加納村）でサルケを掘ったところ、奇怪な生き物「卑湿地（ヤヅ）ベゴ」が見つかったという話が記されている<sup>59)</sup>。

サルケを切る湿地として柴田や菊川の人が挙げたのは、柴田布引から現在のつがる市斎場のある、県道186号線の

北（柴田からみて北西方面）であった。「柴田の北3kmにある馬の草刈り場」（柴田①）、「県道186号北西側のヤヂ」「つがる市畜場付近のヤヂ」（柴田⑤⑦、菊川⑨）、「弥生田・布引方面の湿地がサラケ専門の場所だった」（柴田⑧）という声が聞かれた。多くの家ではヤヂに採掘権を所有していた（柴田④）が、「土地を購入したり、地主からの許可を得て採取」（菊川⑨）するという場合もあった。

**屋敷地** ムラの屋敷地内家屋の裏手が採掘場所であったという事例がある（柴田②③）。現在は豆畑になっている。この場所は、かつてサルケを掘ったため周囲よりも一段低くなっている。屋敷地から採るサルケを「ヤシギサルケ」（屋敷サルケ）と称した（柴田③）。この呼称は話者独自のものではなく、一般的な呼称であったことを話者に確認した。ヤシギサルケは堅く締まって火持ちがよく、良品であったという。

**田** 他家の例を含めると6例である（柴田②③④、菊川⑩、出来島⑭、大畑⑮）。動機としては、「自家では掘るヤヂを所有していなかったため、田から採った」（柴田④）と語る人がいた。田地と異なり、湿地であれば稲作への配慮なしに採掘できるから、採掘場所として理想的だったのだろう。品質としては「田ザラケ>ヤヂザラケ」であるが、採掘場所としては「田ザラケ<ヤヂザラケ」であったようだ。

「田地の改良を口実にサルケを採取し、地主にいっぱい食わせた」というエピソードを語る人もいた（柴田③）。農民のしたたかな生きざまが感じられる笑い話である。

**ため池やヌマ** 木造の西部、丸山や出来島方面では、ため池やヌマから採取することが特徴である。「丸山ため池の底から」（丸山⑫⑬⑭⑮⑯）、「出来島近辺のヌマから」（出来島⑰⑱⑲）採取したという。ため池の場合、水の引き具合は均一ではないので、干上がった場所から順次採取を始めたという（丸山⑳）。

## D.主体

今回の聞き取りでは、話者のほとんどが子ども時代の見聞として語っている。すなわち、子どもという立場で、自身がどう関わったかという証言である。

「切る作業は、男性が中心」という証言が14件で、多くを占めた（柴田①②③④⑤⑧、菊川⑨、丸山⑬⑭⑮⑯⑰、出来島⑱⑲、大畑⑳）。祖父や父がおこなったという。そのなかには、「二人一組でおこなった」（柴田①②、出来島⑱）という証言が含まれる。サルケは直線状に掘り進んでいくが、前方の男性が縦に切れ目を入れ、後方の男性が横に切れ目を入れて陸へ上げるという連携プレーである。切る作業は男性中心であるが、その他の作業は女性や子どもが手伝った（柴田①③、菊川⑨、丸山⑬⑰⑱、出来島⑲、大畑⑳）。切ったものを陸で受け取る、運ぶ、乾燥を促すために積み直す、などの作業である。家族による協働が基本であるが、柴田②のように、20代の若者が他家のサルケ切りを手伝ったという事例もみられる。他家から助けを請うこともあったようだ。

## E.方法

### ・縄を張る、表土を除く

サルケの層を露出させるために、表土を取り除いた。「草の根と土が混じった表層部を取り捨てた」（柴田①）、「表層を1尺5寸除去した」（柴田③）、「田の表土を3尺除くとサラケの層だった」（柴田④）、「表土を15-20cmないし20-30cm取り除く」（柴田⑤）、「テッコダを突き刺し、まず表土を取り捨てる」（出来島⑱）、「田植え前のアラダで、表土を取り除いてからサルケを切る」（大畑⑳）などの事例である。表土の厚みは、柴田⑤のようにせいぜい1尺に満たない場合もあれば、柴田④のように3尺という場合もある。場所によって条件が異なっていた。3尺の場合でも「いくらか掘らなくてもサルケの層です。まず1mも掘ればサルケです」（柴田④）と語るように、1mもの深さでも当人にとってはそれほど深いと感じなかったようだ。

田の場合は、土を戻すことが必須である。上述のうち、柴田③④は田から採取した場合であるが、山から持ってきた赤土や黒土を客土した（柴田④）。

きれいに採取するために、表土除去や採掘に先立ち、あらかじめ縄を張ることも行われた（出来島⑱）。特に、ヌマの場合には水中での作業となるため、見当をつける意味があったと考えられる。筆者のこれまでの調査では下北地方でこの「ハリナワ」を行う事例がみられた（拙稿2016, P. 138）。

### ・採掘する、陸上げる

サルケの採掘には、テンズキ（柴田①②③、菊川⑨）、テンテキ（柴田⑤）、テッコダ（出来島⑱）などと呼ばれる道具（鋤）が使用された。「柄の付いた平らな道具」（丸山⑫⑬）「平べったい刺すような道具」（丸山⑳）、「棒のついた道具」（菊川⑩）も同様の道具のことであると思われる。

注目したいのは、「長短2種類のテンズキを使用した」という柴田①②の事例である。男性二人一組となり、前方の男性が縦に切り込みを3回入れ、続けて後方の男性が横に切り込みを1回入れるという連携プレーである（102ページ、図3参照）。こうすることで、形の崩れや、水中で切ったサルケが流出するリスクを避けることが出来た（柴

田②）。類似した方法は、出来島でもおこなわれた。1人目が大きめに切り、あとの人が3分割するという方法である（出来島②）。ただしこちらは、縦横一尺、厚さ半尺のものを3分割するという事例で、使用する鋤も1種類である。

テンズキを垂直に差し込み、爪先を根元に差し込みながら手前に引いて切り倒す（柴田③）という証言もあった。これは1人でおこなう作業であり、横に切る作業を簡略化して、爪先で折り取る方法である。切るのではなく折ることから、断面が不揃いであった。そのため、のちにカマで整形した（「整形する」の項参照）。

切ったサルケを陸に上げるために、フォークが使用された（柴田①）。サルケを切る場所は水気の多い場所であり、水の浮力を利用して引き上げる場合もあった（柴田②、菊川⑨）。「テンテキで切り取られたサルケは浮かぶように離れた」（柴田⑤）「ヤチの中だから、水の中でスッと浮かぶようになっている」（菊川⑨）という。また、1m以上の深さに及ぶ場合もあるので、「裸」（丸山⑩）や「ドツギ（胴長）着用」（菊川⑨）でおこなわれた。

#### ・深さ

掘る場所によって、深さは異なる。田から採取する場合には「1尺5寸の深さに一段分」（柴田③）というように、田が低くなりすぎないように配慮した。もっとも、「（田で）表土3尺、その下2尺の計5尺」（柴田④）という場合もある。この場合には「山から持ってきた赤土や黒土を入れた」（柴田④）というように、客土（覆土）が相当な厚みで行われた。

ヤチやため池、ヌマから採取する場合は、稲作への配慮は不要であったことから、湿原では2尺～5尺、ため池やヌマでは3尺から7尺といったように、比較的深いところまで採掘がおこなわれた。「ヤチは2段」（柴田③）、「（ヤチで）1尺2寸の直方体を2段。場所によっては1段」（菊川⑨）、「（ヤチで）4～5段、5尺ほど」（柴田①）、「（ため池で）1mほど、つまり3段分」（丸山⑩⑬）、「（ヌマで）1尺を1段として7段分」（出来島②）」を掘った。

#### ・整形する

これまでの筆者の調査では、津軽地方や下北地方で、タヂで切り込みを入れて予め植物の繊維を切ることで、テンズキ（テスキ、テンツキ）による裁断を容易にし、かつ断面をきれいにする工夫がみられた。今回の調査では、この作業とは異なるかたちで、より丁寧な作業がおこなわれていた。すなわち、掘り上げたサルケの断面を、カマを使用して整形するのである（柴田①②③）。「引き上げたものは、真四角ではないんだ。草の根のようなものが欠けたりするんですよ。それを四角にするためにカマを使ったんですよ」（柴田②）という証言では、サルケというものの性質上、からみあった繊維質のために断面が乱れることから、カマを使用して整えるという動機が語られている。また、「（垂直に切り込みを入れたあとで）根元のほうに足先を差し入れて、足の甲で上にあげてやるので、切れ目がすっぱりといかずぐじゃぐじゃになるので、サラケを切り取っている溝のそばに引き上げてから、カマ状の道具できれいに根元部分を切り取るんですよ」（柴田③）という事例では、足先でサルケを折り取ることから、断面が乱れるため、カマを使用して整えるという動機が、採取の方法と関連して語られている。

サルケの採取にかかわる一連の作業のなかで、カマを使用するという事例は、これまでの筆者の調査では木造柴田地区以外に聞いておらず、かつ同様の証言が複数（4件、柴田①②③⑤）あることから、当地ならではの特徴的事例であると考えられる。木造柴田は古来「柴田さるけ」の産地であり、サルケが商品として近隣町村に流通していた。商品であれば、規格や見た目に対する細やかな配慮が必要になる。そのため、採取したものを更に美しく整形するために、カマが使われたのではないだろうか。残念ながら、聞き取りではこれら4事例の話者いずれも売買については知らないと回答していたことを含め、カマを使用することと、商品生産との関連を示す確実な証拠はいまのところない。しかし、より古い時代に行われていた慣行が、その動機や必然性が失われてしまったのちも形だけが伝えられていたのではないかと、ひとつの可能性として指摘しておきたい。

カマは、木造中心街に近いヤダカジ（加福鉄工所）や中館などの地域のカジヤ（農鍛冶）に作ってもらったというサルケ切り専用の特注品（柴田①②③）である。刃渡約22cm、刃幅約6cm、刃線は直線状で腰も撓曲（しおり）もない薄手広刃の刃鎌だが、柄は19cmと短く、刃面は縦横の横断面がいずれも真っ平らである。まさにサルケを平面的に裁断する目的に適った形をしている（99ページ写真）。

## F. サイズと量

### ・サイズ

サルケは、地層から切り取る際のサイズと、乾燥後のサイズが異なるため、採取に関わったことのない話者の証言は、乾燥して縮んだもののサイズである可能性がある。また、地層から切り取ったあとに、さらに二次加工する場合もある。次ページの表2は、聞き取りのデータを一覧にしたものであるが、以上のことに留意して、どの時点のサイズであるかについての注意が必要である。

縦のサイズがテンズキで切り込む深度、横のサイズがテンズキで切り込む幅、厚さは切り込む際の1枚当たりの奥

行きである。表から考えられる平均的な1枚あたりサイズ（乾燥前）は、縦が1尺、横が1尺、厚さが半尺である。このサイズに一枚ずつ切り取る場合もあれば、3枚分を1ブロックとして一辺約一尺の立方体の状態で引き上げる（柴田①②）場合もある。また、縦（深さ）に2枚分を1ブロックとして、縦の一辺（長辺）を2倍の長さに切って引き上げる（菊川⑨）という場合もある。複数枚を1ブロックとして引き上げる場合には、引き上げたのちに2～3分割する。また、平均的な1枚サイズ相当のものを更に3分割するという証言もあった（柴田⑤、出来島⑳）。この場合は、乾燥前のサイズが軽量ブロック相当のサイズとなる。

自家消費用として用いることが主体であるから、厳密な規格があるわけではないが、おしなべて1尺四方、厚さ半尺がサルケ1枚の一般的なサイズだったと思われる。

いっぽう、商品として流通する場合には、サイズは重要な要素となる。大正13年生まれの出來島の男性（出来島㉑）は、約30cm×30cm×15cmを1枚として切り取ったという。一方、柴田の昭和6年生まれの男性<sup>60)</sup>は、約30×30×20cmを1枚として切り取ったという。前者はその3分の1、すなわち約10cm×30cm×15cm(4500cm<sup>3</sup>)を1ヶとし、後者はその4分の1、すなわち約7.5cm×30cm×20cm(4500cm<sup>3</sup>)を1ヶとする。サイズは話者の記憶にもとづくものであり、堆積は概算ではあるが、両者とも大きな差はなかったようだ。

	縦(深さ)	横(幅)	厚さ(奥行)
柴田①	1尺	1尺	5寸
柴田②	40cm	40cm	15cm
柴田③	1尺5寸	1尺	6-7寸
柴田⑤	30cm	40cm	20cm
柴田⑧	20cm	20cm	20cm
菊川⑨	1尺2寸	1尺2寸	3寸
菊川⑩	—	5寸	—
丸山⑫⑬	1尺	1尺	10cm
丸山⑱※	1尺	1尺	10cm
丸山⑳	1尺	1尺	15cm
出来島㉑	1尺	1尺	15cm
大畑㉕	15cm強	15cm強	10cm弱

※話者の出身地(菰根)での事例

表2 サルケのサイズ

・量

筆者がおこなった県下の聞き取りでは、自給用として用いる場合、その年ごとに各家庭で焚く量を採取するケースが多いようだ。しかし、具体的な必要量についての証言を得られたのは、筆者が取材した160余名中わずかに2名である（144ページ表1参照）。木造出来島地区の証言では、4,500(cm<sup>3</sup>)×1,000(個) = 4.5m<sup>3</sup>、木造柴田地区の証言では、18,000(cm<sup>3</sup>)×120(枚) = 2.16m<sup>3</sup>である。柴田のサルケが、出来島のサルケの約2分の1で一冬を賄えるということとは、「柴田さるけ」と呼ばれるだけあって品質がよかった、つまり火力も火持ちがよかったということだろうか。

(6)乾燥

サルケの基本的性質のひとつとして、水分含量の大きさ（保水力）があげられる。多量に水を含んだ状態のサルケを「ナマ」のサルケ（丸山⑫）と表現する事例があった。筆者の調査では、下北地方のむつ市金曲地区に住む昭和9年生まれの男性が、採取したばかりのサルケのことを「ナマ」のサルケと表現している<sup>61)</sup>。この男性はの先祖は津軽地方の金木町（現五所川原市金木町）から移住したという。祖父が金木町、祖母が嘉瀬から100年ほど前に移住したという。地域は遠く離れるが、静岡県藤枝市でも、乾燥前のソブ（泥炭）のことを「ナマ」のものと表現する人がいた<sup>62)</sup>。独特の表現というよりは、一般的な発想にもとづく用語ではないかと考えられる。

また、乾燥後に吸水性を喪失すること（疎水化）、そしてそれが不可逆的な変化であることもサルケの性質の一つである。サルケの乾燥は一般的に屋外でおこなわれるが、乾燥の途中や、乾燥後にノマをかける程度で山積み（サルケニオ）しておいても大して影響がないのはそのためである。

乾燥後の収縮の大きさもサルケの特徴のひとつである。柴田に住む昭和9年生まれの男性は「最初切ったときはかなり大きいけれど、乾けばこんな小さくなっていくんだよ」と語る（柴田⑤）。

・場所

掘り上げた場所の近くで乾燥させるという証言（柴田①②、丸山⑫、出来島㉑㉒、大畑㉕）が多かった。逆に、自宅やその他の場所へ運んで乾燥させるという事例は、今回の聞き取りでは皆無だった。サルケは乾燥前の状態（ナマ）では水分を多量に含んでいることから、その場で乾燥させてから移動したほうが合理的である。デメリットとすれば、自宅や集落から離れた目の届きにくい場所に放置することで、盗難の危険があるという点である。

・積み方と工程

今回の聞き取りでは、大別すると次の5種類の乾燥法が見られた。

- |                |                                            |
|----------------|--------------------------------------------|
| a 「平置き型」       | サルケを一枚ずつ平置きにする。                            |
| b 「ハの字型」       | サルケをハの字に立てるもの。津軽地方では「スモコトラヘルかたち」と表現する者もいる。 |
| c 「将棋倒し型」      | サルケをハの字に立て、片側に斜めに寄せかけるもの。今回の聞き取りで初出。       |
| d 「レンガ積み-窓継ぎ型」 | サルケを列状にレンガ積みする。間隔をあける（窓継ぎ）。                |
| e 「レンガ積み-集塊型」  | サルケを塊状にレンガ積みする。間隔をあけない。                    |



終始おなじ置き方で乾燥させる場合もあれば、置き方を変えて1～3次乾燥までおこなう場合がみられる（図8）。

一次乾燥では、1枚ずつ平置きする（平置き型）か、もしくは平置きで積み重ねる（レンガ積み型）をする場合が8件と比較的多い（柴田①③⑤⑧、菊川⑨、丸山⑳、出来島㉑、大畑㉕）。一次乾燥でハの字に立てかけるものは少なく、3件である（柴田②、丸山㉒⑳）。その理由は、掘り上げて間もないサルケはもろいからである。

二次乾燥、三次乾燥の工程に進むものについては、さまざまなパターンがある。下記矢印で示したものが該当する。多くの場合、乾燥を促進させるため、随時表裏を返したり、積み替える作業がおこなわれた（柴田①⑤、菊川⑨、丸山㉒⑳②、出来島㉑）。この作業を「マガガエシ」という言葉を使って表現する話者もいた（柴田⑤）。また、この作業は比較的軽い労働であるため、女性や子どもも主体的に（丸山㉑、大畑㉕）、あるいは補助的に（柴田①③、菊川⑨、丸山㉒）おこなった。

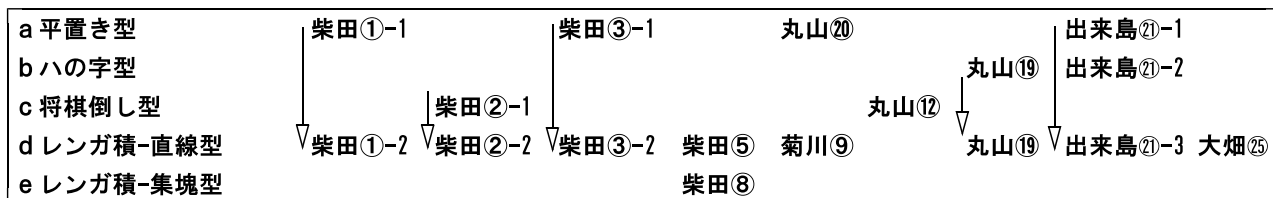


図8 乾燥の工程

※丸山㉑は、話者の出身地である菰槌の事例

※柴田①では、二次乾燥終了後に運搬したが、最下段のみを残し、それをあらためてレンガ積みした。

ちなみに、秋田県横手地方では、ネッコ（泥炭）の乾燥法として、上記dとeに相当する二通りの積み方があったようである（右下写真）。

・時間 乾燥の時間について具体的な回答は少なかった。平置きで1次乾燥が20～1か月、レンガ積みの2次乾燥が1～2か月、トータル3か月ほど（その間に1回、ひっくり返す）という回答（柴田③）や、ハの字に立てて1次乾燥を数日間おこない、その後積み上げるという回答（丸山㉑、ただし話者の出身地である菰槌での事例）が参考になる。



線状に重ねる（参考写真）



面状に重ねる（参考写真）

筆者の調査では、上北地方では放置して長期にわたり自然乾燥を待つような乾燥法がみられたが、津軽地方ではそのような悠長な回答はなかった。上述のように人為的操作を加え、短期集中型でおこなうものが多い。燃料に対する切迫の度合いが異なることに由来するのではないか。

## (7) 運搬

### ・タイミング

**乾燥後に運搬／運搬後に乾燥** 運搬は天気の良い日を選んでおこなわれた。今回の聞き取りでは、採取場所直近で乾燥させたのちに、自宅へ運搬するというパターンが大多数を占めた（柴田①②③⑤⑧、菊川⑨、丸山㉒⑳②、出来島㉑④、大畑㉕ ※ただし丸山㉑は菰槌での事例）。水分を含んだサルケは重く、乾燥後に運搬したほうが合理的である。運搬後に自宅付近で乾燥させるという回答は、今回の調査ではなかった。

### ・方法

**畜力による方法** 柴田①②③⑤、菊川⑨の事例は馬を利用している。カナグルマや大八車を馬にひかせた。

**人力による方法** 菊川⑨、丸山㉒⑳②、出来島㉑、大畑㉕は、人力である。特に丸山では、ため池が奥まで広がっており、水の引いたため池の底から岡伝いかなりの距離を運搬しなければならないことから、体力のある若者が中心となって運搬した。運搬にはショイコが利用された。

子どもや女性が運搬に加わったという証言も複数ある（出来島㉑、大畑㉕）。

**1束の量** 束ねることを「マルぐ」という。また、束のことを「マロ」「マル」という。1マロは5枚（柴田②）、7～8枚（菊川⑨）、10～15枚（丸山㉒）、7枚（出来島㉑）と開きがある。サルケの厚さによって枚数を加減する（丸山㉒）という話も聞かれた。『五所川原市史 史料編Ⅰ』に、一束の量について参考になる記述があるので以下に引用する。「テヅキで大きく四角に切り、長さ一尺、幅四、五寸～七、八寸、厚さ二、三寸にとる。タヂは細かく裁断したり、整形するのに使用した。裁断したサルケを二枚ずつ並べ、高さ二尺に積んだものが一マロであった。六マロで一駄という。（中略）雪が降るとソリに五、六駄つけて売りに行った」<sup>63)</sup>。貴重な記録だが、残念な点が2つ